【三陰三陽の考え方５　生命の危険が・・・　厥陰病】

少陽病は、熱が原因となった内臓障害ですが、寒が原因となる場合は、厥陰病（けつれいびょう）とよびます。臓器の変性、壊死を含め代謝機能の低下した病態です。

厥陰病は、陽の気は上に上がったまま、陰気は下に残ったまま、つまり陰陽の二つの気がバラバラになってうまく身体をめぐらないため手足が厥冷（強い冷え）するわけで、上熱下寒の病態です。口乾がつよく、動悸を訴え、食欲はあるようでも食べると嘔吐が起こり、かえって苦しみます。これはたいへんと誤って下剤などを与えますど、下痢が止まらなくなります。

「陰極マッテ陽ニ転ズ」といわれるように、「正に精気が尽きんとする」病態であるにもかかわらず、かえって一見元気な印象を与えることすらあります。患者さんをよく観察することが大切で、こうした病態には四肢の厥冷を回復させるために、乾姜（かんきょう）や附子（ぶし　先月お話ししましたね）などの新陳代謝機能亢進剤を主薬にした薬方を速やかに与える必要があります。四逆湯（しぎゃくとう）、四逆加人参湯（しぎゃくかにんじんとう）、茯苓四逆湯（ぶくりょうしぎゃくとう）などを煎じてお出しします。